

【研究ノート】

## 「ワケダ」の意味用法

The Meaning of 'wakeda'

林 旭巧

LIN Xuqiao

**要旨** 形式名詞「ワケ」＋「ダ」文の先行研究として、寺村秀夫（1982、1984）、松岡弘（1987）、横田淳子（2001、2002）、大場美穂子（2013）などがあり、彼らはその意味用法の分類についても論述した。「[Qワケダ]では、Qは事実としては既定、既知のことである」（寺村（1984））と指摘されていたが、「既定・既知」とはなにか、さらに、「ワケダ」は「既定・既知」の範疇外の事柄を表すことができるか、など、先行研究にはまだ不明な点がある。

本稿では「ワケダ」について先行研究の「既定・既知」、「了解済み」観点を検討し、「ワケダ」の基本的な意味を規定して、それに基づいて「ワケダ」の意味用法を再分類する。

考察の結果、「既定・既知」は「すでに発生した事実」、「未発生の既定事実」、または「未確認の既定事実」であると判明した。「ワケダ」の基本的な意味は「ワケダ」を伴う文がある事柄を認識する際、内的な意味や本質を把握しながら、PとQの相互関係を「確認」ではなく「理解」するということである。そして、「ワケダ」の意味用法を「イ、既定未発生の実事への理解」、「ロ、既定既発生既確認の実事への理解」、「ハ、既定既発生未確認の実事への理解」の3つに分けた。

### 1. はじめに

「ワケダ」は形式名詞「ワケ」＋「ダ」という構造を持つ。「ワケダ」の意味を捉える際、「ワケ」という実質名詞としての意味と「ワケダ」が持つ意味・働きの間には大きな隔りがある。「ワケダ」はただ表記上の実質名詞「ワケ」とコピュラ「ダ」の組み合わせではないという。従って、本稿は実質名詞との関係を抜きにし、「ワケダ」の意味用法を考察していきたい。また、今までの先行研究では、その意味用法の分類もいろいろ論述されてきたが、本稿はそれらを再検討するうえで、「ワケダ」の意味分類を試みる。

### 2. 先行研究と問題点

「ワケダ」文について、主な先行研究として、寺村秀夫（1982、1984）、松岡弘（1987、1993）、横田淳子（2001、2002）、大場美穂子（2013）などがある。以下に簡単にそれらの先行研究を検討していきたい。

#### 2.1 寺村秀夫の説

「ワケダ」の用法について、寺村（1984）は、『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』において「ワケダ」文の意味・内容を究明し、P(前提・条件、常識・既知情報 以下同)とQ(帰結・結論 以下同)を〈P→Qワケダ〉の形で述べる意味を大きく次の3つに分けている。

寺村（1984）の意味分類

（i）あるQという事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実Pをあげ、そこから推論すれば当然Qになる、ということを用いた。「……コトニナル」と言い替えができる。

（ii）Pという聞き手に身近な事実をあげ、その事実は、ある角度、観点から見るとQという意味、意義がある、ということを用いた。「言い換えると……」というぐらいの軽い感じの場合もある。

（iii） $P \rightarrow Q$ という推論の過程は示さず、Qということ、自分がただ主観的にそう言っているのではなく、ある確かな根拠があつての立言なのだということを言外に言おうとする言いかた。乱用すると独断的、押し付け的な印象を与える。（寺村（1984）p 285）

寺村の研究は意味・内容の分類であり、「ワケダ」使用の具体的な構造・形式についてはふれていないが、この解釈、意味分類の大義は現在に至るまで通用、支持されており、これを大きく覆すものはこれまでにない。

## 2.2 松岡弘の説

松岡（1987）は寺村の意味分類を基盤として、「ワケダ」の最も基本的な意味を「PとQとの間に因果関係、同じ物事の表と裏、あるいは対立の関係等があることを話し手が認め、納得すること」であるとする。そして「PとQとの間に因果関係、表と裏の関係、対立の関係を認め、納得することが基本なことから、PとQのいずれかが言わなくて済む（くり返す必要がない）となれば」、PまたはQのどちらかが消去される場合もあるとして、その構造を以下のように分類している。

松岡の構造分類と意味用法

▶ 両方が提示される場合

⇒ [P、Q] わけだ

P(だ) から、Qわけだ

Pだ。それで (つまり)、Qわけだ

▶ どちらかが消去される場合

① Pを知って、 $P \rightarrow Q$ の関係を納得する場合

→ [(P)、Q] わけだ

② Qを知って、 $P \rightarrow Q$ の関係を納得する場合

→ [P、(Q)] わけだ

③ P、Qの関係が話し手の中で未分化、ないしは融合した場合

→ [一、Q] わけだ

この構造分類の内③について松岡は「話し手の側に、自分のしゃべっていることは聞き手も承知の前後関係の中で述べているのであり、ことさら因果関係を述べなくとも納得してもらえるはずだ」という意思がある場合に生ずる」と分析し、これを寺村の分類の（iii）に相当するものとしている。松岡の意味分類の「因果関係」は寺村の（i）に、「表と裏の関係」は寺村（ii）に相当する。

松岡の分析は構造と意味・内容が中心であり、その他の外形的特徴についての分類はない。ただ部分的にはあるが、「のだ」の文と「わけだ」文の対照の中で、「わけだ」文の前に（「のだ」文同様）「結局、要するに、つまり、一言で言えば、換言すれば、言い替えれば、簡単に言えば、手っ取り早く言えば」などの語句が見られることについて、これらの接続表現は（「のだ」の文同様）P、Qの関係にあって既に前に言われているため繰り返す必要のなくなったQ、あるいはPの部分で代りし、P、Qの関係の存在をより明確に伝えるのが、これらの語句の役割」であると述べている。（松岡（1987）p 17）

寺村と松岡以来、「ワケダ」は「事実からの推論の必然的な帰結」を表すという認識が存在している。同じく事実からの必然的な推論を表す形式であるとされるもう一つの文末形式「ハズダ」との比較から、「Qワケダ」では、Qは事実としては既定、既知<sup>1)</sup>のことである。この「既定、既知」とはどういうことなのだろうか。そして、Qは必ず既定、既知のことを表すのだろうか。それについて考察する必要があると思う。

### 2.3 横田淳子の説

横田淳子（2001）では、「ワケダ」の基本的な意味は、「二つの事柄の間に筋道や道理があり、一つの事柄から筋道や道理に沿って考えていくともう一つの事柄にたどりつく、もう一つの事柄とはそのような結論をたどっていったところから出てきた帰結であるということ」を述べるものである。言い換えれば、二つの事柄の間に論理展開による一つの関係を認める言い方である」（p 49～50）と指摘している。この引用からわかるように、横田も寺村（1984）の二つの事柄の間の論理関係という立場を取っている。その上で、「ワケダ」文を話者の事柄認識の流れに注目して以下のように5つに分類した。

#### ① 帰結用法 1 結果

（1）体重をはかったら 52 キロになっていた。先週は 49 キロだったから、一週間で 3 キロも太ってしまったわけだ。

#### ② 帰結用法 2 原因・理由

（2）今年の米のできが良くなかった。冷夏だったわけだ。

#### ③ 納得用法

（3）最近円高が進んで、輸入品の値段が下がっている。だから洋書も安くなっているわけだ。

#### ④ 捉え直し用法

（4）彼女の父親は私の母の弟だ。つまり彼女と私はいとこ同士なわけだ。

#### ⑤ 派生用法

（5）わたしは国史を専門にしているわけですが、わたしのような文献を扱う者の立場からすれば、もっと史料を大切にすべきではないかと思うんです。

<sup>1)</sup> 寺村（1984：277）すなわち、「Qハズダ」は前にも記したように、Qが未知で、その事実性が問われていることが引き金となっているのに対し、「Qワケダ」では、Qは事実としては既定、既知のことであるが、その事実がどうしてそうなのか、という問いに対して答えようとする心理が引き金になっている、という点である。

上述の例文は横田(2001)から引用され、例文の下の実線と波線は筆者が引いた。(1)～(4)の例文は実線で示した事柄Pと波線で示した事柄Qとの二つの事柄の関係を述べているものである。それらの中、(1)はPが原因・理由で、Qの結果にたどりつき、(2)はPが結果で、Qがその原因・理由で、(3)はQがまず話者の認識としてあり、それはなぜかと疑問を持っているとき、Pの情報を得て、Qの事情に納得することで、(4)はPを違う角度、観点から捉え直し、違う意味、意義があることを主張し、それを聞き手に注意させるために使うと述べられている。(5)は前述の4つの分類からの派生的な用法で、前提となるPが具体的には明示されない漠然としたものである。

そこで、横田は二つの事柄の間の論理関係、すなわちPとQの関係という観点から見れば、「ワケダ」のすべての用法にその論理関係の特徴があるとは限らないということになる。派生用法は、そもそもPが存在しないため、PとQの関係で分類するという主張が妥当であるかどうかをも再確認する必要があるのではないか。

#### 2.4 大場美穂子の説

「ワケダ」は二つの事柄PとQの関係（QがPの当然の帰結であること）を示すのではなく、話し手や聞き手が事柄について認識しているかどうかにかかわる形式であると見て、新たに「ワケダ」の用法を3分類した大場美穂子(2013)について検討する。

大場(2013)はまず「ワケダ」が表す基本的な意味を次のように仮定する。

「ワケダ」の基本的な意味：

「ワケダ」<sup>2)</sup>を伴う文が表す事柄が文脈の中ですでに話し手と聞き手の了解事項として存在することを表し、「ワケダ」を用いてその事柄を確認するという働きを持つ。(p 53)

それから、「わけではない」という否定形式の用法を、必然的な結論であっても「ワケダ」が使えない場合と推論過程が示されない「ワケダ」を通して検証し、「これまでの文脈や発話状況から話し手と聞き手の間で了解されていると考えられている事柄を否定する」(p 55)のために用いられていると論述し、上述の仮定はそれほど突飛なものではないと述べている。

話し手と聞き手の間ですでに了解されている事柄の観点から、「ワケダ」の用法を以下のA、B、Cのように整理することができる<sup>3)</sup>。

A: これまでに述べられた事柄から、話し手と聞き手に共有される事柄について確認する。

<sup>2)</sup> 大場(2013)の論文では「わけだ」を使い、本稿は例文の他は統一ですべて「ワケダ」と表記する。

<sup>3)</sup> A、B、C各用法の例文を大場の例を引用し参照されたい。

(21) 三島の回想によれば、彼はその一世を風靡した人気作家に向かって「僕は太宰さんの文学はきらいです」と言った。すると太宰は誰にともなく「そんなことを言ったって、こうして来ているんだから、やっぱり好きなんだよな」と言ったという。三島は「今では自分も同じ目にあうようになった」と書いている。若い人々が三島のところにやってきて、面と向かって「僕はあなたの作品が好きじゃない」と宣言するわけだ。(村上春樹『サラダ好きのライオン 村上ラジオ3』)(大場(2013)p 61)

(22) 大学はいま市場による淘汰が進んで、どこも危機的状況なわけですから、「危機だ、危機だ」という警鐘を鳴らさないと、制度改革も意識改革も進まない。(内田樹・名越康文『14歳の子を持つ親たちへ』)(大場(2013) p 61～62)

(23) 話は変わって、このあいだ近所の魚屋さんに行ったら、シシャモを男女(つまり雄雌)別に並べて売っていた。値段は雄のほうがだんぜん安い。雌は子持ちで卵を持っているから、そのぶん価値が高いわけだ。(村上春樹『サラダ好きのライオン 村上ラジオ3』)(大場(2013) p 62)

B：これから論を展開するにあたり、その前提となるような、話し手と聞き手に共有されている事柄について確認する。

C：新情報を際立たせるために、述語部分が話し手と聞き手に共有される事柄であることについて確認する。(大場 (2013) p 60~61)

Aの用法は、これまでの話の流れからこのような事柄が共有されていることになるだろうと確認する用法であり、Bの用法は、これから話をするに当たって、前提となる事柄について確認するという用法である。また、Cは、文の中の一部がすでに話し手と聞き手の間で共有されている情報であることを示すことによって、その他の情報が今提示されたことであるということを実際立たせる用法である。(大場 (2013) p 61)

以上の先行研究をまとめて、「ワケダ」の用法分類は以下の表1に整理することができる。

大場の主張は寺村らが主張した「[ワケダ]はPとQとの関係を表す形式」であるという認識から離れた。「推論」の観点から、「ワケダ」のすべての用法を解釈することが難しい。一方、大場の「[ワケダ]は話し手と聞き手の間ですでに了解済みの事柄について確認するために用いられる形式である」という主張はすべての用法を解釈できる。しかし、「確認」という概念だけでは「ワケダ」の基本的な意味とはやはりずれが出る。本稿は寺村らと大

表1 先行研究における「ワケダ」の用法分類

	寺村 (1984)	松岡(1987)	横田 (2000)	大場 (2013)
第I分類	①あるQという事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実Pをあげ、そこから推論すれば当然Qになる、ということを用いた。「……コトニナル」と言い替えができる	①Pを知って、P→Qの関係を得る場合	①帰結用法1 結果 ②帰結用法2 原因理由 ③納得用法	A これまでに述べられた事柄から、話し手と聞き手に共有される事柄について確認する
第II分類	②Pという聞き手に身近な事実をあげ、その事実を、ある角度、観点から見るとQという意味、意義がある、ということを用いた。「言い換えると……」というぐらいの軽い感じの場合もある	②Qを知って、P→Qの関係を得る場合	④捉え直し用法	B これから論を展開するにあたり、その前提となるような、話し手と聞き手に共有されている事柄について確認する
第III分類	③P→Qという推論の過程は示さず、Qということを用いたのではなく、ある確かな根拠があつたの立言なのだということを用いた。乱用すると独断的、押し付け的な印象を与える	③ P、Qの関係が話し手の中で未分化、ないしは融合した場合	⑤派生用法	C 新情報を際立たせるために、述語部分が話し手と聞き手に共有される事柄であることについて確認する

場の観点を踏襲し論述を進めようと思う。

「話し手と聞き手の間ですでに了解済みの事柄について確認する」という観点では「了解済み」は寺村（1984）の「既定・既知」と同一概念だと思う。それが寺村（1984）の「既定、既知」ということの内実である。

### 3. 既定・既知

前に論述したように、「Qワケダ」では、Qは事実としては既定、既知のことである（寺村（1984））と指摘されてきたが、「既定・既知」とはどんなものなのか、また「ワケダ」は「既定・既知」の範疇外の事柄を表すことができないのだろうか。それらについて今までの先行研究ではまだはっきりわかっていないので、考察する。

「既定、既知」に関しては、寺村（1984）は「Qは事実としては既定、既知のことである」とのみ述べているが、詳しく説明していない。

「既定」は文字通りすでに決まっていること、「既知」はすでに知っていること、あるいはすでに知られていることである。反対語はそれぞれ「未定」、「未知」である。「ワケダ」は「未定」「未知」のことを表すことができるかどうか、検討する。

寺村（1984）は、『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』において「『ワケダ』は、先行する部分（節）の表すあるまとまった叙述内容が、ある既定の事実からの当然の帰結であるとして、話し手がさし出す、その話し手の見方を表すものである」（p 275）と論じた。また、同じく事実からの必然的な推論を表す形式であるとされるもう一つの文末形式「ハズダ」との比較から、「ワケダ」の特徴について「『Qハズダ』はQが未知で、その事実性が問われていることが引き金となっているのに対し、『Qワケダ』では、Qは事実としては既定、既知（下線は筆者注）のことであるが、その事実がどうしてそうなのか、という問いに対して答えようとする心理が引き金になっている、という点である」（p 277）と述べている。

松岡（1987）は寺村の意味分類を基盤として、「ワケダ」の最も基本的な意味を「PとQとの間に因果関係、同じ物事の表と裏、あるいは対立の関係等があることを話し手が認め、納得すること」であるとする。また、「『ノダ』と『ワケダ』の意味の違いを問うとすれば、前者が話し手の一方的な断定の感じが強いのに対し、後者の方は聞き手を意識した相互了解（下線は筆者注）的な判断ということになる」（p 3～4）と指摘する。

劉向東（1996）は「ワケダ」の意味・用法について、大きく四つの意味機能に分けている。①当然の帰結・結果、②あるコトに対する補足的説明、③既知情報（下線は筆者注）の再提示、④常識・慣例、顕在の事実の提示に四分類している。

市川保子（1996）も次のように「ワケダ」の既定を表すと述べている。「『ワケダ』は当然の帰結を表すという点で『ハズダ』に似ているが、『ハズダ』が既定（すでにあること、あったこと）・未定（将来に起ること）両方の事柄について使えるのに対し、『ワケダ』は既定のこと（下線は筆者注）にしか使えない」（p 72）と言っている。

大場（2013）は「ワケダ」が表す基本的な意味と用法について、以下のように述べている。

「ワケダ」を伴う文が表す事柄が文脈の中ですでに話し手と聞き手の了解事項（下線は筆者注）として存在することを表し、「ワケダ」を用いてその事柄を確認するという働きを持つ。（p 53）

上述の先行研究からわかるように、「ワケダ」は「既定、既知のこと」であり、「相互了

解的な判断」であり、「話し手と聞き手の了解事項、話し手と聞き手に共有される事柄」でもある。筆者はそれらが同一概念であると思う。つまり、「相互了解的な判断」や「話し手と聞き手の了解事項、話し手と聞き手に共有される事柄」は「既定、既知」の内実であると理解できる。

しかし、横田（2002）は、「ハズダ」「コトニナル」との言い換えから、「①帰結用法1結果、②帰結用法2原因・理由、③納得用法、④捉え直し用法、⑤派生用法」の5分類にそって、「ワケダ」の先行文Qの既定か未定かを考察した。「ワケダ」の先行文Qは、話し手にとって未知であるかどうか、未確認であるかどうかなどによって、未知、既知、未確認の場合を表すことができる。

(6) なにしろコレラの潜伏期間は短いのである。その二人がいつ、どこで羊羹を食べるか分からないが、今日中だとすれば、明日か明後日までには、コレラ特有の下痢が始まるわけだ。(横田（2001）p 57)

(7) 時差が四時間あるから、日本時間のちょうど正午につくわけだ。(森田良行・松木正恵 p 196)

(8) 時差が四時間あるから、日本時間のちょうど正午についたわけだ。(森田良行・松木正恵 p 196)

上述の例文について、「(6) と (7) は論理的に考えていけば事柄の結果が必然的に出てくる未知の結果を述べる場合である。……(中略) (8) の「正午についた」人が自分である場合、つまり既知の事実の場合にも使えるし、他人である場合、つまり未確認の事柄の場合にも使える」(p 16~17) と分析されている。しかし、横田（2002）の未知を表すことができるという主張は不適切ではない。先ほどの例文では、「コレラ特有の下痢が始まる」、「日本時間のちょうど正午につく」という結果が必然的に出て来るが、今のところでは、「下痢も始まっていない」し、「目的地にもついていない」し、とにかくすでに決まっている、未発生の結果となる。つまり既定、未発生<sup>の</sup>事柄である (8) は「正午についた」人が自分である場合、すでに発生した、既知の事実である。つまり既定、既発生かつ既確認の事柄である。「正午についた」人が他人の場合、その人物にとって既定の事柄になるが、話し手にとって「その人が確実に正午についたかどうか」、確認しなければわかるはずがない。つまり既定既発生未確認（下線は筆者注）の事柄である。

既定は発生か否かによって、また二つに分けられる。それぞれ、既定未発生と既定既発生である。既定既発生はさらに確認されたかどうかによって、二つに分けられる。それは既定既発生未確認と既定既発生既確認である。

したがって、「Qワケダ」におけるQは事実としては既定、既知のことであるという考え方は本稿のように詳しく述べれば、Qは「既定未発生<sup>の</sup>事実」、「既定既発生既確認<sup>の</sup>事実」、「既定既発生未確認<sup>の</sup>事実」の三種類を表すことができると筆者は考える。

#### 4. 「ワケダ」の意味分類

上述したQの三分類に基づいて、「ワケダ」文の再分類を試みる。再分類する前に、「ワケダ」が表す基本的な意味を仮定しておく。

本稿の「ワケダ」が表す基本的な意味を次のように記述する。

「ワケダ」の基本的な意味：

「ワケダ」を伴う文がある事柄を認識する際、PとQの内的な意味や本質を把握した上で、PとQ前後両者の相互関係を理解するという。

本稿は先行研究を踏まえて、この基本的な意味に従い、以下のように「ワケダ」について新しい分類を試みたい。

#### イ. 既定未発生 of 事実への理解

一般現実的にはまだ発生していないが、論理上では必ずいつか、どこかで発生するという事柄に対し、前後のPとQの相互関係を把握し、理解する。真理、ルールや社会規則はこの分類に含まれる。

(9) 取り皿に取った料理を残すのはマナー違反。自分の食べられる分だけ取りましょう。ひとつのお皿の中の料理をみんなで食べるわけだから、おはしであれこれいじったり、かきまぜたりしないようにね。(バーバラ寺岡『魅女ってみませんか』角川書店 1987)<sup>4)</sup>

(10) これができるというのは、下半身に粘りと安定感があるということで、それによって上体の軸が安定し、腕が正確に振れば、コントロールの良いパスも打てるわけだ。あまり強いボールは必要ないので、低い姿勢なら低い姿勢のまま、コンパクトに振り抜くことが大切だ。(前島芳雄(著)／松原雄二(著)『月刊 TENNIS JOURNAL』2005)

(11) 逆に A 点の空気を振動させた場合には、空気自体は移動しないので、どんなに振動を大きくしても「風」として感じられることはないが、振動はあらゆる方向に広がっていくので、A 点から離れ過ぎない限りどこにいてもその振動を、「音」として聞くことができるわけだ。(安齋直宗『シンセサイザーの全知識』リットーミュージック1996)

(12) 短所と長所は表裏の関係にあるため、「あきらめの早い」ということは「気分転換が早い」ということでもある。気分転換が早ければ、失敗が尾を引かず、一つのことに固執しないで柔軟な発想や対応をすることができるわけだ。つまり、これは“長所”なのである。(堀場雅夫『仕事ができる人できない人』三笠書 2003)

(9) は「ひとつのお皿の中の料理をみんなで食べる」ので、「おはしであれこれいじっ

<sup>4)</sup> (9) ~ (18) の例文は中納言KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から検索し、引用した例文である。



たり、かきまぜたりしないように」と食事マナーを教えてくれるという因果関係が現れる。

(10) は「これができるというのは、下半身に粘りと安定感があるということ」なので、「上体の軸が安定し、腕が正確に振れれば、コントロールの良いパスも打てる」という因果関係を示している。(11) は「振動はあらゆる方向に広がっていく」ので、「A点から離れ過ぎない限りどこにいてもその振動を、「音」として聞くことができる」という因果関係を表している。(12) は「気分転換が早い」と「一つのことに固執しないで柔軟な発想や対応をすることができる」の間に因果関係が潜んでいる。

#### ロ. 既定既発生既確認の事実への理解

すでに起こってしまった個別の事実に対して、その事実をもたらした条件や前提、原因など、あるいはその事実が導いた結果などと結びつけ、前後のPとQの相互関係を把握し、理解する。その事実は誰でも知っている事柄か、もしくは第一人称の事柄である。誰でも知っているからこそ、一人称の事柄でなくても、確認済みの事柄であると言えるだろう。また、第一人称の事柄なので、簡単に確認できる。

(13) その日の午後、私は日本将棋連盟副会長の二上達也九段より、将棋盤と将棋の駒を贈られた。前年十一月の将棋の日の催しのお手伝いをした御礼というわけだ。将棋好きの私には身に奈る光栄の品。「家宝にします」とおし頂いた。(吉川精一『月曜日のカーネーション』海竜社1987)

(14) そして、ギャラガーに説明を求められると、メッセージについて自分たちが知っていることを話し、J・Tにもらったコピーを渡した。ギャラガーは言った。「いやはや。わたしは最初から見当ちがいをしていたわけだ。悪かったね、ドクター・コラン」「あなたのせいじゃないのよ、ギャラガー」(ロバート・ウォーカー(著)／瓜生知寿子(訳)『魔王のささやき』扶桑社2002)

(15) 私は観音寺市長として十六年間、競争がなく、潰れない予算主義という自治体の長を経験した。その一方で、加ト吉という会社の経営者として、競争に負けたら倒産という厳しい社会の中で、生き残るためにいろんな施策を講じてきた。つまり、私は予算主義の役所と決算主義の企業という両方の世界を体験してきたわけだ。(加藤義和『大前研一のアントレプレナー育成講座』プレジデント社2003)

(16) 洞窟の内側からは見えないが、出入口の岩の向こうに木製の正面階段があり、見張りがそこを守っている。おそらくわたしのいるところから、十五フィートと離れていないところに、見張りが立っているわけだ。(リック・ボイヤール(著)／田口俊樹(訳)『デイジー・ダックス』早川書房1989)

(13) は「前年十一月の将棋の日の催しのお手伝いをした」ということが過去で、それが「日本将棋連盟副会長の二上達也九段より、将棋盤と将棋の駒を贈られた」という結果

に導いた。前後の因果関係が「ワケダ」を通して理解できる。(14)は「わたしは最初から見当ちがいをしていた」と過去のことをギャラガーは説明し、「悪かったね」と謝ったという因果関係も一目瞭然、理解できる。(15)は「観音寺市長として十六年間、競争がなくて、潰れない予算主義という自治体の長を経験した、加ト吉という会社の経営者として、競争に負けたら倒産という厳しい社会の中で、生き残るためにいろんな施策を講じてきた」ということは「つまり」を通じて、「予算主義の役所と決算主義の企業という両方の世界を体験してきた」と同じ内容の換言関係への理解を示している。(16)は「木製の正面階段を見張りが守っている」と「わたしのいるところから、十五フィートと離れていないところに、見張りが立っている」と換言関係を表している。

#### ハ. 既定既発生未確認の事実への理解

すでに起こってしまった個別の事柄であるが、その現場にいないので、あるいは本人のことではないので確認できない事柄に対し、前後のPとQの相互関係を把握し、理解する。

(17) 彼女の思惑どおり、彼は（たぶんまだ子供は欲しくなかったんだろうが）彼女と別れたくなかったので、腹をくくって、女の出産を認めたわけだ。（松本ありさ『次の恋までのカウント・ダウン』大和書店1992）

(18) そのあと、いくつかの質問をした。どの女性依頼人も答えてがらない類の質問だ。夫人はそれに答えた—友人からそれとなく指摘を受けた。自分は夫を信じているが、でも、確かなところが知りたい。それで、あなたに…。要するに、彼女は真っ赤な嘘をついたわけだ。（ベルンハルト・ヤウマン（著）／小津薫（訳）『死を招く料理店』扶桑社2005）

(17)は彼は「彼女と別れたくなかったので」、「腹をくくって女の出産を認めた」という因果関係を表しており、彼女も彼に確認せずこう思った。(18)は「友人からそれとなく指摘を受けた。自分は夫を信じているが、でも、確かなところが知りたい。それで、あなたに…。」と夫人が答えた内容と「彼女は真っ赤な嘘をついた」ということが換言関係を成している。

#### 5. おわりに

本稿は「ワケダ」についての先行研究を踏まえて、「Qワケダ」のQが「既定・既知のことである」ということを検討し、「既定・既知」とは、「既定未発生の実事」、「既定既発生既確認の実事」、「既定既発生未確認の実事」ということが分かる。さらに、「ワケダ」の意味用法を3つに分類してみたが、それぞれ「既定未発生の実事への理解」、「既定既発生既確認の実事への理解」、「既定既発生未確認の実事への理解」である。しかし、それについてはまだまだ不十分なところがあるので、より深く考察する余地があり、今後の課題にしたいと思う。

参考文献

- (1) 市川保子 (1998) 『日本語誤用例文小事典』 凡人社 70～74
- (2) 大場美穂子 (2013) 「『わけだ』『わけではない』の用法についての一考察」『日本語と日本語教育』41: 47～66
- (3) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第2巻 くろしお出版
- (4) 松岡 弘 (1987) 「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』24: 3～19 一橋大学語学研究室
- (5) 松岡 弘 (1993) 「再説—『のだ』の文・『わけだ』の文」『言語文化』30: 53～74 一橋大学語学研究室
- (6) 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- (7) 横田淳子 (2001) 「文末表現『わけだ』の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』27: 49～64
- (8) 横田淳子 (2002) 「文末表現『わけだ』の用法—『はずだ』『ことになる』との比較」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28: 13～26
- (9) 劉向東 (1996) 「わけだ」文に関する一考察『日本語教育』88: 48～60